

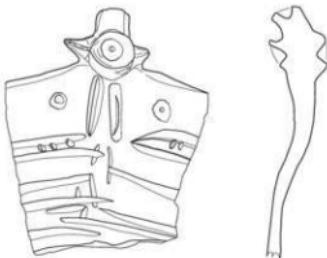
栃木県栃木市中根八幡遺跡

第2次発掘調査概要報告

ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION OF THE NAKANEHACHIMAN SITE

ring-shaped earthen mound Jomon site,

Tochigi city; the second season short report.



中根八幡遺跡学術発掘調査団

Nakanehachiman Research Project

奈良大学・國學院大學栃木短期大学

Nara University and Kokugakuin Tochigi Junior College

〔『文化財学報』第35集、77—98頁、2017年3月31日発行・収載〕

栃木県栃木市中根八幡遺跡

第2次発掘調査概要報告

中根八幡遺跡学術発掘調査団

1. 2016年度調査の概要

中根八幡遺跡は、栃木市南部（旧藤岡町中根）の渡良瀬遊水地（旧赤間沼）に面した台地縁辺部に立地する環状盛土遺構である（第1図a）。昨年度、第1次調査について報告を行った（中根八幡遺跡学術発掘調査団2016）。今年度の調査も昨年同様に、奈良大学と國學院大學栃木短期大学の教員・学生による調査団を結成し、栃木市教育委員会の後援と、地元中根地区の協力のもと、学術発掘調査を実施することとした。

今年度の調査では、まず第1に昨年度に実施したA区の掘り下げを引き続き実施した。これにより、昨年度よりも盛土中部から下部の人工的な様相を把握することができた。また、A区から約40m離れた東側の民家の裏側において、排水を貯めるために盛土の一部が壊されており、多数の遺物が散在するとともに、盛土上部から中部付近と考えられる土層が露出していた。そこで、調査団では、栃木市教育委員会と協議の上、この地点をB区として調査を実施することとした。

なお、今回の調査では、大学の教員・学生が企画し、遺跡を活用したパブリック・アーケオロジーの取り組みを実施した。現在、遺跡を活用する取り組みは全国各地で多数行われている。通常は、発掘調査の場合であれば、現地説明会によって、発掘の成果を広く市民に公開する試みが行われる。今回、我々調査団では、将来の文化財専門職を担うと考えられる発掘に参加する学生が自ら企画を考え、そして遺跡を活用した取り組みを現地で学び、かつ実践できる機会を設けることとなった。本プロジェクトでは、はじめての試みであり決して十分な成果があったかどうかはわからない。しかし、参加した学生が次回に向け様々な問題を認識できたことは間違いない。そして、現場最終日に実施した現地説明会では多数の方々にご来場いただいた。実施にあたって、サポートをいただいた方々に改めて謝意を表したい。

（小林・中村）

2. 調査・整理の経過

（1）発掘調査

8月25日（木）晴：國學院大學栃木短期大学の学生・教員19名が現地に入り、まずA区周辺の草刈り、Aトレンチの掘り起し、原点移動を行なった後、A1～A3グリッドで10cmずつ掘り下げていった。

8月26日（金）晴：午前中は引き続きAトレンチを掘り下げた。午後は、とちぎ子どもの未来創造大学登録講座「縄文遺跡を発掘しよう！」を開催し、栃木県内の小学生を対象に発掘・土器洗い・拓本・創作音楽活動を行なった。

8月28日（日）晴：境内湧水池の水を抜き、2年に一度の中根地区総出での池浚いが行われた。これに合わせて、池底の様子を確認した。

9月3日（土）晴：本日より本格調査を開始した。國學院大學栃木短期大学より機材を搬入後、Aトレーンの掘り下げを継続した。また、B区の掘削土から遺物を回収するためふるいがけを開始した。土器・石錐・注口土器の突起・耳栓・黒曜石などが採集された。

9月4日（日）晴：A区南側の林～クリ堀～B区に測量用の杭打ちを行った。発掘班は、Aトレーン掘り下げ作業をした。午後に奈良大学先発隊が到着し、A区の掘削作業を引き継いだ。A1～A5を10cmごとに掘り下げ、A7は壁の精査のみを行った。

9月5日（月）晴：午後に奈良大学後発隊と合流し、A1～A5の北壁の精査を行った。A7は西・南・北壁を精査した後、西壁を若干拡張した。短大チームはB区掘削土のふるい作業をした。午後は、B区のポンプでの排水作業を開始した。

9月6日（火）晴：A1～A5は南壁を精査した後、A2～A5のみ掘削作業を行った。掘削土を5mmメッシュのふるいにかけた結果、貝玉や動物の骨などが検出された。A7は、西壁のみ精査を行った。炭化物が混ざる層が出現する。B区は、掘削土のふるい作業とともに、深堀区の壁面精査を開始した。

9月7日（水）晴：A区は、新たにA6を1.4m地点まで掘削し、これと同時にA1～A5・A7を掘り下げた。炭化物が混ざる層が出現する。B区は、深堀区の掘り下げを開始した。Ba1～Ba4グリッドを設定し、本日より両大学の学生を一部交代しながら10cmずつ下げていった。測量班は昨年度同様、平板を用いて等高線を引く作業を開始した。

9月8日（木）雨→曇→大雨→晴：坂井秀弥教授が指導のために来られた。作業開始一時間ほどで大雨となったので公民館内で土器を洗浄した。午後は雨が弱くなつて晴れ間も見えたが、下野市立しもつけ風土記の丘資料館、栃木県埋蔵文化財センター、寺野東遺跡を見学した。

9月9日（金）晴：A地点は、A1は1.6m、A2～A4は1.3m、A5～A6は1.5mまで掘り下げて掘削を止めた。またA7でピットを1基検出した。A2の北壁から大洞C2式土器1点、A4の北壁から籠形土器が1点出土した。B区は、作業続行。

9月10日（土）晴：A区は、午前に写真撮影を行い、午後から子供向けイベント「レッツゴージーモン！」を行った。A7で新たにピットを1基確認した。B区は、土層断面図の作図にとりかかった。午後より栃木県史跡整備市町村協議会の担当者研修会が開催された。

9月11日（日）晴：午前中より地元の方々や研究者が見学に訪れた。A区は、午前中に炭化物の採取を行った後、道具類の片付けをした。午後には現地説明会を行い、70名以上が参加した。その後、両トレーンで、調査区を埋戻し、機材を短大に搬収した。

9月12日（月）晴：午前中に奈良大学へ搬出する遺物の選別と宿舎の片付けを行い、解散した。

（高垣・木ノ内）

（2）整理作業

整理作業は、國學院大學栃木短期大学はB区・A3・A5の出土品、奈良大学は他のA区の出土品を担当し作業を進めた。國學院大學栃木短期大学では、後期授業開始とともに毎週火曜日の考古学演習、考古学フィールドワーク、放課後を利用して整理作業を開始した。12月23～25日には補講期間を利用して集中的に行われた。奈良大学では、後期授業開始日から平成29年1月にかけて整理作業及び概報作成を行った。

（高垣・木ノ内）

3. A区における調査の概要

(1) A区の調査概要（第1図d）

A区は、前年度から調査を継続している調査区であり、東西7m、南北1mで面積は7m²である。調査区の東側から1mごとにグリッドを設定し、A1グリッドからA7グリッドまでとした。遺物の取り上げ方法は、前年度の方法を踏襲し、標高22.2mを基準に10cm単位の人工層位で取り上げた。（中根八幡遺跡学術発掘調査団2016）。

A1グリッドからA6グリッドまでは、表土である黒色土層（厚さ約15cm、しまり弱い）、その直下から本年度掘削を終了した10b層まで、盛土層と考えられる。しかし、2層は根による搅乱が激しく、盛土最上層を明確に掴めなかった。ただし、2層には縄文時代以降の遺物は認められず、盛土最上層である可能性が高い。7層では、ロームの再堆積と考えられる黄灰褐色土（厚さ約30cm、しまり・粘性強い）を確認した。遺物は表土から10b層まで確認できる。また、3a・b層から10b層まで小獸骨片・炭化物が認められる。

A7グリッドは、上部を根により大きく削られている。そのため、5層が最上層となっている。5層直下は10a・b層で11層から13層まで続く。本年度は13層まで掘削を終えた。11・12層は、遺物を多く含み、小獸骨片や焼土も含む。13層は、ソフトローム上面の可能性がある黄灰褐色土（厚さ約20cm、しまり・粘性強い）である。

なお、A7グリッド13層でピットを3基検出した。直径は12cm程度、深さは約5cmであった。遺構に伴った遺物は出土しておらず、時期の確定はできなかったが、後期前半から後半頃の可能性がある。

今回の調査では、A区のグリッド内に多数の炭化物が散布しており、盛土の形成過程を検討するためこれらの炭化物を採取した。

（岩永）

(2) 出土遺物（第2図）

A区出土の土器は、昨年度と同様に中期の土器を少量含み、後期後半を多く有する特徴がある。そして、これに晚期前半から晚期中葉段階をわずかに含む。総じて土器の破片は小片が多い。本報告では、若干の土器・土製品を掲載する。1は加曾利B2式の精製土器である。外面の文様帶内部に細かい磨きを有する。2は籠形土器であり、大洞C2式である。外面に細かい網目状の籠目を有する。内面はナデを施している。3は大洞C2式の深鉢口縁部片である。外面に縦文帯と沈線による入組文を有する。

4は土偶で、腰から脚にかけての部分と考えられる。5は土製耳飾で鼓形を呈し、椎骨形とも呼ばれる。鼓状に成形したのち、外面をナデにより平滑にし、鼓部がわずかにくぼむ。丁寧に磨いている。石器については、剥片石器のほかに石錐などがある。

（岩永・小林）

4. B区における調査の概要

(1) B区の調査の経緯・経過（第1図e）

2015年度調査時の踏査において、盛土北側部分の畠地の一角が、隣家の排水用に小型重機で掘削され、遺物を含む堆土が周囲に盛られていることを確認していた。その後、栃木市教育委員会と協議の上、地権者の同意を得て2015年11月21日の午後、2台のふるいを用いて遺物回収を試みたが、量が多く夏の調査時に体制を立て直して実施することとした。

2016年度調査計画においては、遺物回収と、掘削部分の壁面を精査して土層断面を観察することの2点を盛り込み、國學院大學橋木短期大学を主担当として実施した。遺物回収は1cmメッシュのふるいを2台用いて実施し、掘削排土の1/3程度を終了した。掘削排土からは、多量の土器およびチャート・黒曜石等の石器・剥片類、土製円盤、耳飾などが回収された。このうち剥片石器・剥片類は、共同研究者の後藤佳一氏に分析を依頼した。

一方、壁面調査については、まず水中ポンプを用いて排水するとともに、北・西・南面を垂直に掘り下げた。このうち、西面を重点的に調査することとし、最大で幅20cm程度を徐々に掘り下げていった。結果として、現在の地表面から40~50cm程度は既に一度掘削されており、この部分の遺物はふるいで回収した。その後、遺物包含層と考えられる黒色土に至り、1m単位のグリッド（北側よりBa1~Ba4）と、標高229mを基準として垂直方向に10cm単位の人工層位を設定して遺物を取り上げながら精査した。なお、南寄りの壁面から水が湧き出したため、精査は北寄り4m分とした。重機による掘削部分の底面からは、幅50cmのサブトレーンチを設け、さらに掘り下げるところ、壁面に褐色を呈するピット状の落ち込みを認めたが、平面やサブトレーンチの反対側壁面では確認することができなかった。その後漸移層を経て、ローム層に到達した。ローム上面の精査により、平面上に幅12cmのピットと思われる黒ずんだ部分を確認した。調査日程の関係上、これ以上の平面精査は行わず、北・西・南の3面の土層断面図とサブトレーンチの平面図を作成し、写真撮影ののち、ブルーシートと土嚢で壁面を養生して2016年度調査を終了した。

第1図eに南面と東面の土層断面図を示した。大きく5層に分層できる。このうち、表土は近年の掘削土、埋土はそれ以前に掘削した後に堆積したものであり、2層に区分できるが、上層はプラスチックゴミなどを含む。下層はゴミは少なく、水分を多く含む。遺物包含層として確認できるのは、その下の黒褐色土・にぶい黄褐色土である。黒褐色土A・Bは締まりの有無などで比較的明瞭に区分できる。骨片も多く混じる。黒褐色土Aは締まり具合で3層程度に区分できる可能性がある。西壁中央には褐色の落ち込みが確認されたが、掘り込み開始面は確認できなかった。また、サブトレーンチ中も確認できていない。

当初の想定以上に深く掘り返されていたため、盛土・遺物包含層とみられる部分はわずかに確認したのみである。黒色土の詳細な分層やA区との対比は行っていないが、A区同様に焼土や骨片を多く含む部分がみられるものの、ローム再堆積層など特徴的な層は認められない。このうち、注目されるのは、南西隅にのみ確認された黒褐色土Bである。このことは縄文時代当時において南西隅側への傾斜のあったことをうかがわせる。

(中村)

(2) B区西壁出土遺物（第4図）

表土・埋土出土のものは除き、黒色土以下から出土した遺物のうち時期の判別できる破片ができる限り図示した。時期別には、阿玉台式（1・8）、大木7a式（9）、加曾利E式（2・10・18・26）、加曾利E3式（19）、加曾利E4式（20・27）、称名寺I式（21）、称名寺II式（3~5・11・22・28）、堀之内1式（15）、堀之内2式（6）、加曾利B2式の帶縄文系（12）・同縄文を施す鉢（29）、加曾利B3式の算盤玉形土器（30）、加曾利B2~3式の斜線文系（31）、曾谷式（7）、安行1~2式（16）、紐線文（23）、附点文系（32）、詳細不明の後期土器破片（13・14・25）、網代の明瞭な底部（17）。網代の不明瞭な底部（39）がある。

これらをグリッド別、人工層位別に配列したのが第4図である。B1a-70~80cmの11とBa3-80~90cmの28は同一個体と推定されるほか、他の土器を含めて出土レベルと土器の相関関係は認められない。このことは掘削・盛土による混在とみる傍証となろう。

さて、これらの組成をみると、次に述べるB区掘削排土全体で多い後期安行式期（粗製土器を含む）の破片は少なく、中期以前が半数を占める。既に削平された部分に、後期後半が多く含む上層があったことを推測できるが、この点の検証は掘削盛土の範囲外での調査を要する。

（中村）

（3）掘削排土採集の土器（第5～8図）

掘削排土採集土器のうち、時期・系統を検討できる破片を、口縁部を中心に抽出した。なお、以下の同定にあたり、菅谷通保氏、林克彦氏、江原英氏、江原美奈子氏、古谷涉氏、関根憲二氏、金子直行氏、細田勝氏、塚本師也氏、谷藤保彦氏、鈴木徳雄氏より教示を得た。

1～4は中期前葉の阿玉台式である。このうち1はIb式、2はII式、3・4は勝坂式の平口縁の影響をうけたものでIV式としておく。加曾利E1式古段階に併行する可能性がある。5～11は中期後半の加曾利E式で、このうち5～9は1～2式、11は4式である。

12～14は後期初頭の称名寺I式で、13の突起の両側面には渦巻状沈線が浅く入る。15は同II式である。16～18・20は後期前葉の堀之内1式、22～24は同2式である。19は堀之内式段階の櫛歯状工具による粗製土器。21は堀之内1式とみられるが、詳細不明。25～61は後期中葉の加曾利B式の精製土器である。25は加曾利B1式、26・27は同2式の鉢。28は加曾利B1式、29～33は同2式の波状口縁深鉢およびその突起。34～36は加曾利B2式の平縁深鉢。36は加曾利B2式の波状口縁、37・38は算盤玉形土器、39・40は浅鉢。41～45は加曾利B2～3式と思われる。46～60は加曾利B2式～曾谷式期の斜線文・格子目文を施すもの。61は縄文の上に沈線を施すもので加曾利B1式。61～78は曾谷式ないしその前後のもの。79～93は後期後葉の安行式で、このうち79～84は安行1式。94～98は曾谷式～安行2式に併行する西関東の高井東式。99・100は後期後葉の注口土器。101はおそらく東北・後期後葉の瘤付土器。102～104は後期後葉。

晩期は少なく、105～107の3点を確認したのみである。105は安行3a式、106・107はおそらく安行3c式期。108～136は後期中葉～晩期前葉の粗製土器である。108～127はいわゆる紐線文土器で、108・109は口縁直下、110～112は口縁やや下に粘土紐を貼付したもの、113～117・119～121・123～127は口縁直下に直接刺突を刻んだもの。128は円形の貼付文の両脇から弧線が描かれているものだが、詳細不明。129は無文の壺。130～134は無文土器。135は晩期の折返口縁の粗製土器。136は加曾利B式の粗雑な縄文を施した粗製土器。137～144は底部破片である。

（中村）

（4）掘削排土採集の剥片石器類（第9図）

今回の報告書に掲載した石器はすべてB区の掘削排土中から回収されたものである。層位的な担保がない状況下であるため、遺跡の全体像を把握することは困難である。従って、掲載した石器単体の記述を中心として、そこから推察される遺跡の石器製作について述べて行くこととする。

1～4は石鏃である。1は黒曜石を用いた凸基有茎鏃で、表裏両面の基部側に素材剥片面を残している。裏面に残された素材剥片面は表面に観察される削痕は遺跡への搬入過程で生じたキズと考えられる。非常に薄い素材剥片から製作されたものと推察される。2・3はチャートを用いた凸基有茎鏃である。2の身部側縁は先端部で外湾し、肩部で内湾する緩やかなS字状を呈する。基部側縁は緩やかに内湾しており、肩部が突き出た形状を呈する。3の身部側縁は先端からほぼ直線で、肩部で若干内湾する。基部側縁は逆に緩やかな外湾を呈する。先端部の極一部と基部を欠損している。4はチャートを用いた凹基無茎鏃である。裏面に大きく素材剥片面を残し、器体が厚い。器体中央まで達する平坦剥離が見られず、急角度の調整剥離が周辺

部に施されている。断面形状も歪であり技術的、素材剥片選択の両面において稚拙である。

5～7は石鎚の未成品である。5は黒曜石、6・7はチャートを用いている。5は二次調整の序盤の段階と判断され、素材剥片の打面及び打瘤部に対して調整が行われた段階で事故による折れが発生し、製作を放棄したものと推察される。6は二次調整の最終段階のものと考えられる。7は器体の半分以上が欠損しているため詳細は不明であるが、遺跡内の他の石鎚と比べ厚みは同程度なのに對して幅が広いことから、中盤から後半段階の製作途中のものと考えられる。8は石鎚模造品（大工原2017）と考えられるものである。非常に厚みがあり、着柄の方法など他の石鎚と同様の機能を確保できるものとは考えにくい。今後、技術形態学的な検討を行い、石鎚との比較の中で独立した器種としての存立可能性を検討する必要があろう。

9は石鎚の未成品である。平坦剥離による調整段階で器体下部を欠損し、その後も調整を続けているが、先端部の欠損により放棄したものと推察される。10は錐である。欠損はなく、断面が菱形を呈している。11～14は削器である。器体の一側縁または二側縁に片面からの調整を加えている。11は板状を呈する剥片を素材としている。右側縁に表裏両面からの調整が加えられている。15は二次調整剥片である。右側縁に若干の調整が施される。裏面には調整剥離は施されていない。石鎚の未成品の可能性もある。16～18は石核である。16・17はチャート、18は黒曜石である。16は打面を固定して表面の1面のみを作業面として剥片を剥離している。17についても打面をほぼ固定し、作業面を表面の1面に設定している。16・17の両者とも節理面を残しており、剥片剥離が一方から進行していったことが伺える。18は上下両面を打面として剥離が行われている。器体には遺跡搬入段階に付いたと推察される削痕が残る面が観察されることから、遺跡搬入段階の黒曜石はかなり小形であったことが推定できる。

（後藤）

5. 表面採集遺物（第3図）

今年度表面採集した遺物は、土器・土製品・石製品などである。土器は、特に中期～後期初頭の土器が、盛土の南東側で多く採集できる。土偶（2）と石剣（4）は現在、栗林となっている削平部において表面採集されたものである。2の土偶は、右肩周辺のみが残存しており、外面に刺突文が施される。右側の乳房が残る。4は、石剣であり、両端部を破損する。刃側と考える部分はわずかに研磨痕跡が認められる。

A区周辺で表面採集した遺物として、大形の耳飾り（1）があり、直径は約5.5cmをはかる。内面には三叉文と凹線を施している。外表面は、ともに丁寧に磨いている。A区が所在する盛土遺構の北西付近では他にも耳飾りが表面採集されている。そのほか、出土地点が不明であるが、石錘（3）を表面採集しており、両端部に切り込み部を有する。長さ4.8cmをはかる。

また、遺跡所在地の地権者から表面採集資料の提供を受け、調査団ではその表探地点を確認した。表探地点は、環状盛土遺構と想定される高まりよりも西側の畠地である。縄文時代中期を中心とする時期の土器がまとまって採集されており、環状盛土範囲内外に中期集落の存在が推定される。5は阿玉台Ⅴ式の口縁部破片で刺突を有する隆帯で区画した部分に斜線を充填している。6は中峰Ⅰ地点型の胴部片であり、隆線による波状文と2条の刺突を有する隆帯をもつ。7は、加曾利EⅠ式古段階の端部が屈曲する口縁部片であり、刺突列が方形に並ぶ。8は、阿玉台Ⅳ式の口縁部上位付近の破片で、幅広の刻み列を有する半円形の橋状取手をもつ。9は、加曾利EⅠ式中段階の胴部片であり、幅広の隆線による波状文を有する（以上、塚本師也氏の教示を得た）。10は称名寺式の口縁部片で、やや太めの沈線に区画した磨消し縄文帶内部に、刺突列を有する。11は台付鉢の脚部で、穿孔を有する。外反する底部の端部には刻みをもつ。

（岩永・小林）

6. パブリック・アーケオロジーの取り組み

(1) 奈良大学の取り組み（写真17～24）

①取り組みの概要

今回、奈良大学が実施したパブリック・アーケオロジーの取り組みは、平成28年度奈良大学研究助成「考古遺産の調査・公開・活用に関する実践的研究」（研究代表者：坂井秀弥）に基づくものである。本研究は、考古遺産・すなわち遺跡の発掘調査、研究活動、研究成果の還元などを通して、遺跡の所在する市民にその公開と活用をはかるという「パブリック・アーケオロジー」の手法を参考に、実際に本学の教員・学生・大学院生によって考古遺産である橿木市中根八幡遺跡において調査・公開・活用が一体となった取り組みをケース・スタディーとして実践するものである。現在までに各地の大学の考古学講座が主体となったこうした体系的な取り組みの実践例は数少なく、本研究の実施が重要なケース・スタディーとなると考える。

こうした取り組みを実施した経緯は、奈良大学考古学研究室において坂井秀弥が中心となって、埋蔵文化財行政と史跡の保護の研究を進め、全国の主要な史跡を中心行政的な問題と史跡保護の現状・問題・将来などについて検討を行ってきたことがきっかけとなった（坂井2004）。そして、今回小林が発掘調査を実施する中根八幡遺跡の調査を通じて、市民シニア向けと小中学生向けに分けて、取り組みを実施することにした。

②パブリック・アーケオロジーの事前学習

本取り組みを実施するにあたり、事前にパブリック・アーケオロジーに関する学習検討会を実施した。8月3日、大阪市文化財協会において、パブリック・アーケオロジーを研究している岡村勝行氏にレクチャーを受けた。この日は、大阪市文化財協会が実施する発掘調査現場（国立病院機構大阪医療センター敷地内）を見学し、主に前期難波宮跡と江戸期の武家屋敷跡、戦時中の防空壕跡を見学し、現地でパブリック・アーケオロジーの実践方法を学んだ。そして、大阪歴史博物館において、ボランティアスタッフによる案内説明を受け、岡村氏から大阪歴史博物館でのパブリック・アーケオロジーの取り組みについて説明を受けた。このように岡村氏とボランティアガイドの方からパブリック・アーケオロジーの方法論及び実践論についての話を伺い、中根八幡遺跡での実践に対する課題を明確にしたのである。

③計画の立案と準備作業

発掘調査を実施する前に、調査に参加する教員と学生でパブリック・アーケオロジーに関する検討会を行い、現地で実施する取り組みについて、市民シニア向けには、現地説明会（調査全期間実施し、現地調査最終日に橿木市と連携した現地説明会を実施する）と遺跡に隣接する公民館において現地調査最終日に純文衣装と出土遺物の見学会を実施し、合わせて小中学生向けに夏休み子供向けプログラム2016「レッソゴージーモン！」を実施する計画を立案した。8月前半までに、考古学実習室で数度検討会を実施し、現地にて事前準備作業を実施した。

④現地での取り組み

市民シニア向イベント

市民シニア向の現地説明会は、調査全期間実施し、遺跡周辺に居住する市民の方々に遺跡の重要性と歴史

について説明を行った。また、遺跡に隣接する公民館において現地調査最終日に縄文衣装と出土遺物の見学会を実施し、数名のシニアの方々に学生が対応して実施した。

小中学生向けイベント

夏休み子供向けプログラム2016「レッツゴー ジョーモン！」

実施日 2016年9月10日（土） 12時より・参加人数7人

パブリック・アーケオロジーの一環として、発掘現場と神社の敷地を利用した縄文クイズラリーを実施した。パネルを使った縄文人の生活に関する問題を計7問（耳飾り、食べ物、家、石、土器、石器、動物について）用意し、各問1～2人が担当者となって出題と解説を行うものである。アンケートも兼ねた解答用紙を参加者に渡し、各ポイントを巡ってもらう。問題によっては、実際に遺跡から出土した骨や土器等の遺物を解説時に見てもらった。クイズ終了後は、オリジナルの縄文入シールをお土産として配布した。クイズの対象年齢を小学校低学年と想定して作成したが、当日は大人の参加もあり、年齢に合わせた解説を各自心がけた。また、縄文時代の復元衣装の体験や実際に土器に触れられるコーナーを設置し、様々な方法で縄文を体験できるプログラムを実践した。

アンケートにおける評価は上々であったが、問題がやや難しいという指摘が半数以上あったため、改善点としたい。
(小林・萱原・新里)

(2) 國學院大學栃木短期大学の取り組み（写真25～32）

①取り組みの概要

栃木県が地域の課題に対応した活動を支援する「栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業」に、中根八幡遺跡の整理作業と地域への情報発信を主体とした「とちぎの古代遺産新発見」プロジェクトで応募した。採択は9月だが、この活動の一環として調査期間中・調査後に以下のよう取り組みを行った。

本格的な調査の開始前だが、8月26日には、小・中学生向け企画「縄文遺跡を発掘しよう！」を実施し、その準備として前日より調査ならびに本学人間教育学科学生向けの発掘体験を行った。また、9月11日の調査最終日には現地説明会を開催した（研究者を含め約70名）。これらの事業は、前述の奈良大学主催事業と合わせて、ホームページで告知したほか、ポスター・チラシを県内主要博物館、市内小中学校、中根地区全戸に配布した。また、地元コミュニティFMである「FMくらら857」の市役所枠を借用し、約30分の番組で告知し、9月10日には現地中継も行われた。下野新聞と読売新聞地方版では現地説明会の告知記事が掲載され、地元ケーブルテレビでも説明会の様子が放映された。

調査後には、11月12日・13日の学園祭（斯花祭）において、他の日本史系サークルと合同で活動成果展を行い、この中で調査成果をパネル・实物・パワーポイント発表で解説した。2月18日には中根公民館、3月20日には栃木駅前の國學院大學栃木学園教育センターを会場に、学生による成果報告会を開催した。また、栃木県でのプロジェクト報告会で報告した。さらに遺跡を紹介する簡単なリーフレットを作成中である。

このうち、特筆したいのが「縄文遺跡を発掘しよう！」のために実施した人間教育学科、特に子ども教育フィールド小学校・幼稚園專攻と共同で実施した企画である。当初、小学生に対するアプローチに関し、小学校教員養成のノウハウを学びたいと考えて同学科に依頼したところ、音楽教育を担当する早川富美子教授の協力を得ることとなった。考古学側からは、社会科教育用に遺跡の調査体験を用意する一方、早川教授からは、音楽教育用の音楽創作体験の企画が提示された。これまで縄文時代の「音」については、わずかな樂

器研究があり、考古学系のイベントにおいては、それらを復元した土器太鼓・土笛・石笛などの演奏が行われてきた。これに対し、今回は人間教育学科側の手法を学ぶこととして、必ずしも縄文音楽の「復元」ではなく、縄文のイメージをもとにした「創作」に力を入れる方向で、内容を一任した。当初、図形楽譜という手法を用い、土器や文様の「カタチ」を音符に変換して演奏することを検討し、中根八幡遺跡出土土器破片の文様をリズム化したり、声で表現する試みが行われたが、後期の土器文様は比較的単調であり小学生向けには不適当という結論となり、後述のような内容となった。なお、火炎土器を図形楽譜として利用した斎藤孝太郎氏の試みを後日知った（<http://electronicgreen.jp/>）。

（中村）

②縄文土器の破片をもとにした「音楽づくり」

実践の経緯

本年度初めて、日本文化学科と人間教育学科とのコラボレーションにより、人間教育学科の学生有志が2日間、発掘体験の機会を得て、さらに2日目に栃木県主催事業である「とちぎ子どもの未来創造大学」の「縄文遺跡を発掘しよう！」に参加登録をした小学生の発掘体験のサポートをすることになった。そこで、考古学担当の中村講師と筆者との話し合いのなかで、発掘した土器の破片をもとに、学生が小学生をサポートしながら音楽をつくるという活動ができるものかと企画し、実践することになった。

人間教育学科の学生のなかで、特に小学校教員の免許状を取得する学生たちは、筆者が担当する音楽の授業のなかで音楽をつくる活動、「音楽づくり」を学んでいる。「音楽づくり」は、小学校音楽科の学習指導要領において、「児童が自らの感性や創造性を働かせながら自分にとって価値のある音や音楽をつくる活動」として位置づけられ、声や身の回りのあらゆるものを使って音楽をつくる活動である。そこで、本実践では、形や文様、大きさ、色などが異なる土器の破片を楽譜に見立てて、即興的に表現する活動を試みることにした。実際に破片を叩いて音を出すことができないため、音素材として身近な素材や、できる限り縄文時代に存在したと思われるものを取り入れることにした。そして、筆者が全体を進行し、学生たちが小学生のサポート役となり、ワークショップ形式で音楽づくりの活動を行うことにした。

小学生が参加する前日、学生同士で30分ほどシミュレーションを行ったが、学生たちも破片をもとにした「音楽づくり」の活動は初めての体験であり試行錯誤が続いた。当日は模造紙の上に1人が土器の破片3点までを自由に並べるという制限を決め、あとは学生たちのサポートに任せることになった。

実践の概要

【期日】 8月26日（金）午後3時25分～午後3時55分

【対象】 小学校4年生～6年生児童20名

サポート学生：子ども教育2年生5名、1年生4名、日本文学2年生1名、合計10名

【目的】 昨年度採集した土器の破片をもとに、グループで音楽づくりをする。

【音素材】 箸、小ほうき、すりこぎ、すり鉢、竹ざる、植木鉢、縄、石、竹、竹ぼら、土笛、小豆、クルミ、えごま、栗、貝殻。

【内容】

①縄文時代の暮らしや食べ物について話をする。

②全員で輪になり、各自が選んだ音素材で音回しをする。

・1回目は自由に音を出し、2回目は別の音の出し方を工夫する。

- ③児童が表現した音を順番に重ね、音の重なりを楽しむ。
- ④土器の破片1点を拡大して描いた絵を見ながら、声や体を使って表現する。
- ⑤4つのグループに分かれ、土器の破片を模造紙の上に自由に並べて、「音楽づくり」をする。
 - ・音素材は自由に選び、破片は1人3点までとし特徴を感じ取って表現する。
- ⑥グループ発表をする。
 - ・各グループの工夫点等をコメントする。
- ⑦活動の振り返りをする。

実践を終えて

短い時間ではあったが、初対面の児童とサポート役の学生による土器の破片をもとにした音楽づくりの活動は、和やかな雰囲気のなかで終了することができた。はじめは戸惑っていた児童も、「これは模様がある」「ここはギザギザしている」など、発掘した土器の破片の形や文様の特徴を捉えながら、各自が選んだ音素材で様々な音の出し方を工夫するなど、児童の想像力の豊かさにサポート役の学生たちも驚いていた。4つのグループとも児童やサポート役の学生が指揮者となり破片による图形楽譜を表現していたが、1人ひとりの音を良く聴きながら、音から音楽としてまとめていくという点に関しては課題が残った。今後、サポートする学生たちの力を向上させていくことが必要であるが、発掘&音楽のコラボレーションによる「音楽づくり」の活動は、とても楽しく可能性があると思われた。

(早川)

調査・整理・成果公開参加者（学年は2017年3月現在）

奈良大学：坂井秀赤（教授）小林青樹（教授）岩永祐貴（大学院修士1年）壹原朋奈 木ノ内暉 新里達（学部4年）郷原麻鈴
仲原夏菜 中島愛理（学部3年）栗野翔太 桐部夏帆 杉浦正和 松岡奏 三宅直宜（学部2年）石川智観 上野あさひ 草木歩乃 佐々木仁志（学部1年）

国学院大學桜木短期大学：追田真純 大谷舞菜 川添智文 斎藤優一 坂本月 篠原大輝 嶋田真子 菅田孝健 田辺理奈 飛田彩哉子 長谷川用 町田果林 村上啓太 渡辺律（日本文化学科2年）小星野彩香 塩草瑛 篠崎由実 富田圭祐（日本文化学科1年）岩崎広樹・柏崎千子型・小金沢陽菜・國分美咲・原なつみ・水越道香（人間教育学科2年）稲葉成美・公家由紀葉・鈴木華・星千尋（人間教育学科1年）安良岡伸之（科目等履修生）白瀬利（漢陽女子大学校留学生）酒寄雅志（教授・日本文化学科長）後藤正人（教授・人間教育学科長）早川富美子（教授）日比香子（准教授）中村耕作（専任講師）白山実（事務長）石坂昌樹（事務次長）高森良友（学生課長）岸美知子（助手）柿沼里恵子（助手）高垣美奈子（学芸員）

九州大学大学院：福永将大 館林市教育委員会；宮田圭祐 波州市教育委員会；後藤佳一 井川文化財研究所；中島将太

協力者

中根地区 中根八幡神社 柳本市教育委員会 柳本県教育委員会 小山市教育委員会 下野市教育委員会 下野新聞社 FMくらら857 柳本ケーブルテレビ 国學院大學考古学研究室

熊谷教諭 坂本勝雄 石塚孝市 田村正昭 小島正明 福富林 谷内英樹 福富善明 大出光一 栗田寿樹 尾島忠信 高見哲士 小澤美和子 秋山隆雄 長谷川陽

伊藤佑真 石坂茂 井上武 猪瀬明日美 江原英 江原美奈子 小川勝和 大網信良 大熊佐智子 大島孝博 囲村勝行 長田友也 小曾根葉月 金子直行 小松崎百恵 小森哲也 小森牧人 斎藤恒夫 斎藤栄吉 佐藤誠 菅田紗子 菅谷通保 鈴木徳雄 関根慎二 大工原農 高橋悦子 武川夏樹 夢沼香由 谷藤保彦 球本師也 豊島直博 橋本澄朗 林克彦 伴場聰 平原信恭 古谷涉 細田勝 松原継一 宮内信雄 宮川博司 宮田毅 宮田裕紀枝 盛野浩一 山口耕一 山崎太郎

本概要報告執筆者

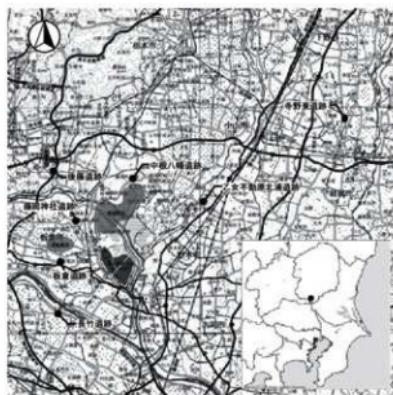
小林青樹・中村耕作・早川富美子・後藤佳一・高垣美菜子・岩永祐貴・萱原朋奈・木ノ内暁・新里達

参考文献

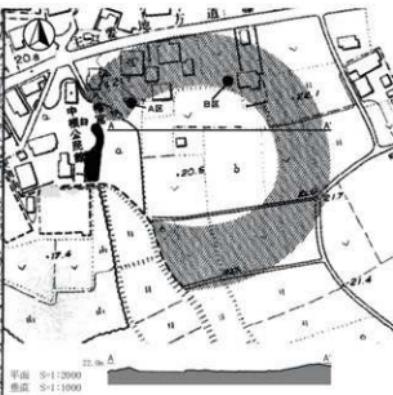
- 江原 英 1997 「寺野東道路V（縄文時代環状盛土遺構・水場の遺構編－1）」 桐木県教育委員会・(財)桐木県文化振興事業団
大内千年・下総考古学研究会 2004 「下総考古学研究会が揭示した「中峠式」各型深鉢と房總半島における勝坂式後半諸類型について」『縄文集落研究の新地平3～勝坂式から曾利へ～ 発表要旨』縄文集落研究グループセミナー研究会
坂井秀弥 2004 「理謎文化財行政と史跡の保護」「日本の史跡～保護の制度と行政～」名書刊行会
下総考古学研究会 1993 「千葉県松戸市中峠遺跡第2次調査報告」「下総考古学」13
大工原豊 2016 「下布田型石器の研究－縄文晩期中葉の飛行機縫の型式－」「石器を中心とする押庄剥離系列石器群の石材別広域編年」平成28年度科学研究費補助金成果報告書
中根八幡遺跡学術発掘調査団 2016 「栃木県栃木市中根八幡遺跡第1次発掘調査概要報告」「文化財学報」第34集

上記概要報告のはか下記において成果の一部を公表した

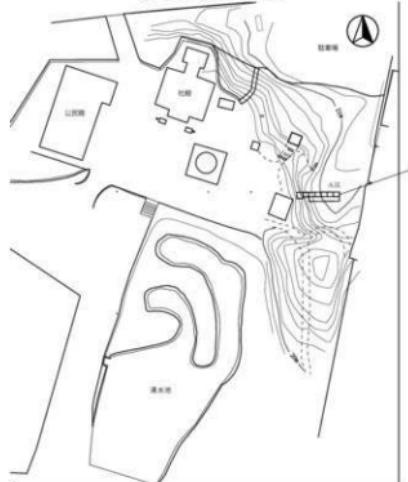
- 中村耕作・小林青樹・桃井飛鳥・岩永祐貴・松尾栄津子 2016 「環状盛土遺構の形成と終焉の背景—栃木市中根八幡遺跡の研究—」
考古学研究会第62回総会研究集会
小林青樹・中村耕作・桃井飛鳥・岩永祐貴・松尾栄津子 2016 「栃木市中根八幡遺跡の環状盛土遺構の研究」日本考古学会第82回総会研究発表（『同発表要旨』に要旨掲載）
中村耕作 2016 「北関東における縄文・弥生変革－栃木市中根八幡遺跡の調査－」國學院大學栃木短期大学公開講座
中根八幡遺跡学術発掘調査団 2017 「中根八幡遺跡」「栃木県埋蔵文化財センターだより」2017年1月号
小林青樹 2017 「縄文晩期終末の社会変動と農耕の受容」「季刊考古学」第136号



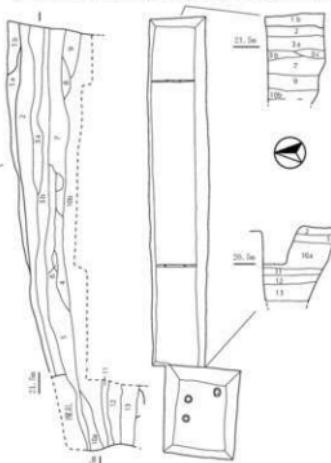
a. 中根八幡遺跡の位置



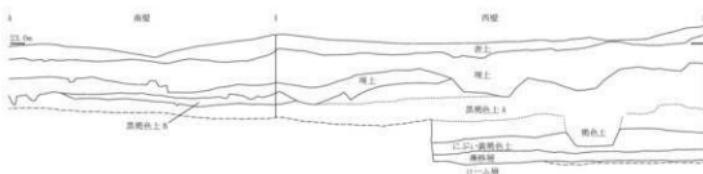
b. 中根八幡遺跡全体図（勝岡町史）と環状盛土断面図



c. 中根八幡神社境内とA区の位置 (S = 1:800)



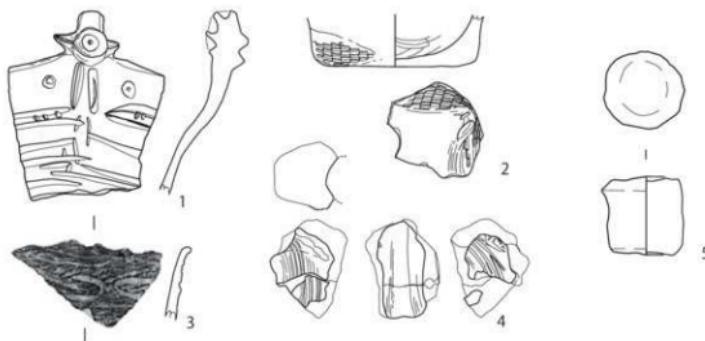
d. A区平面図・土層断面図 (S = 1 : 80)



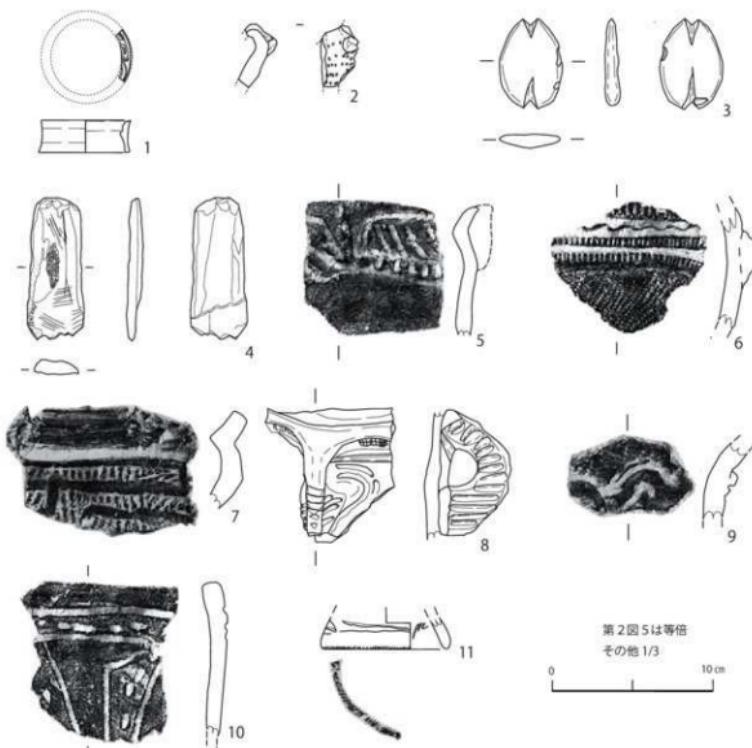
e. B区土層断面図・サブトレンチ平面図 (S = 1 : 50)



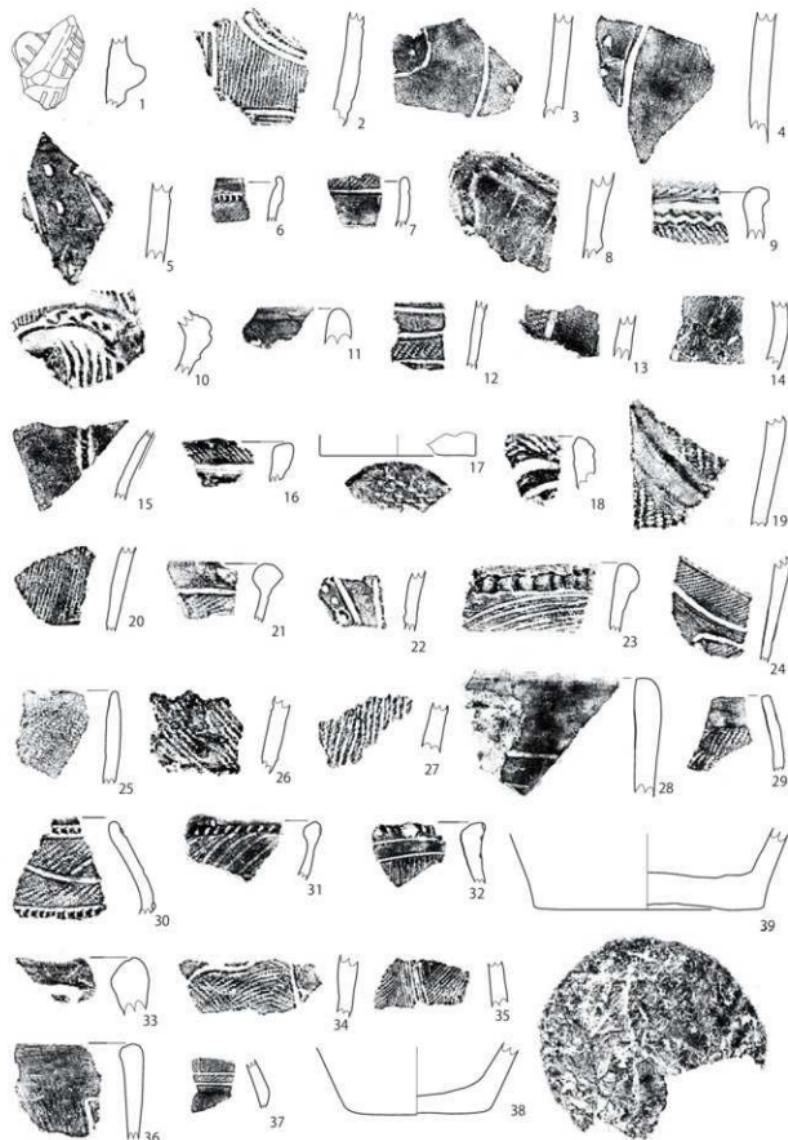
第1図 中根八幡遺跡の位置と調査区



第2図 A区出土遺物



第3図 中根八幡道路表面採集遺物

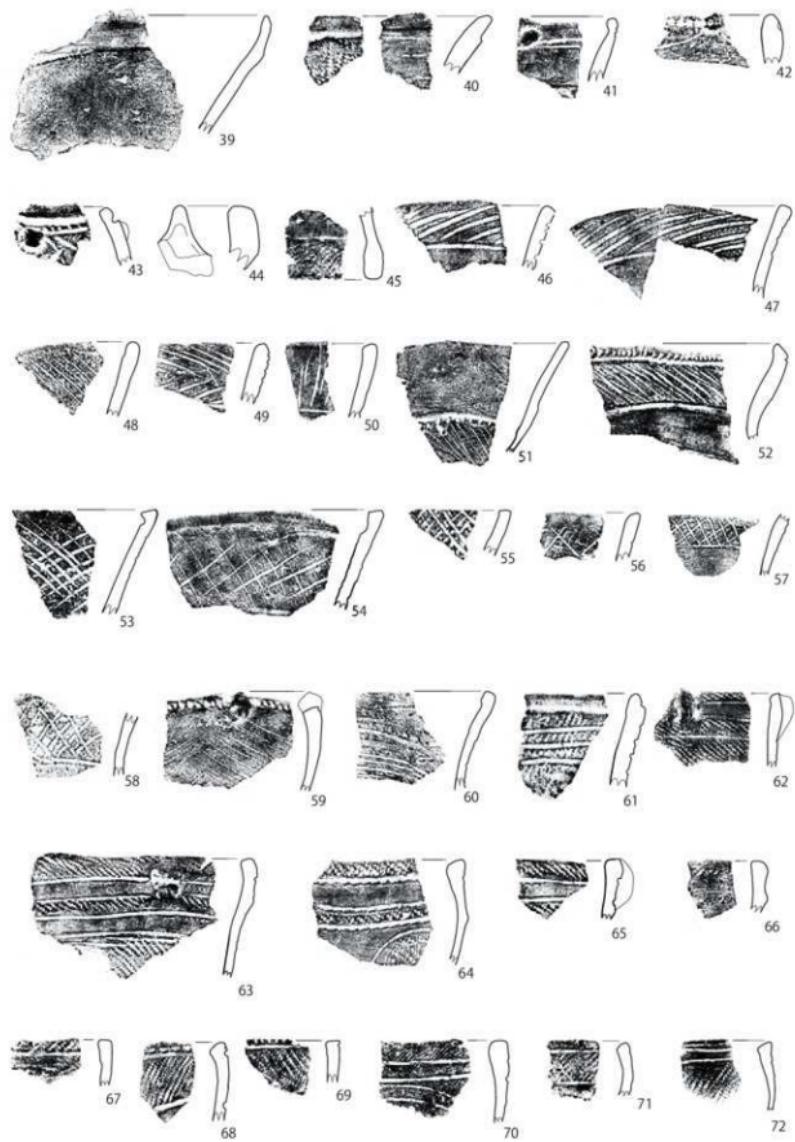


1-7: Ba1-60~70cm 8-14: Ba1-70~80cm 15-17: Ba2-70~80cm
18-25: Ba3-70~80cm 26-32: Ba3-90~95cm

第4図 BaK出土土器

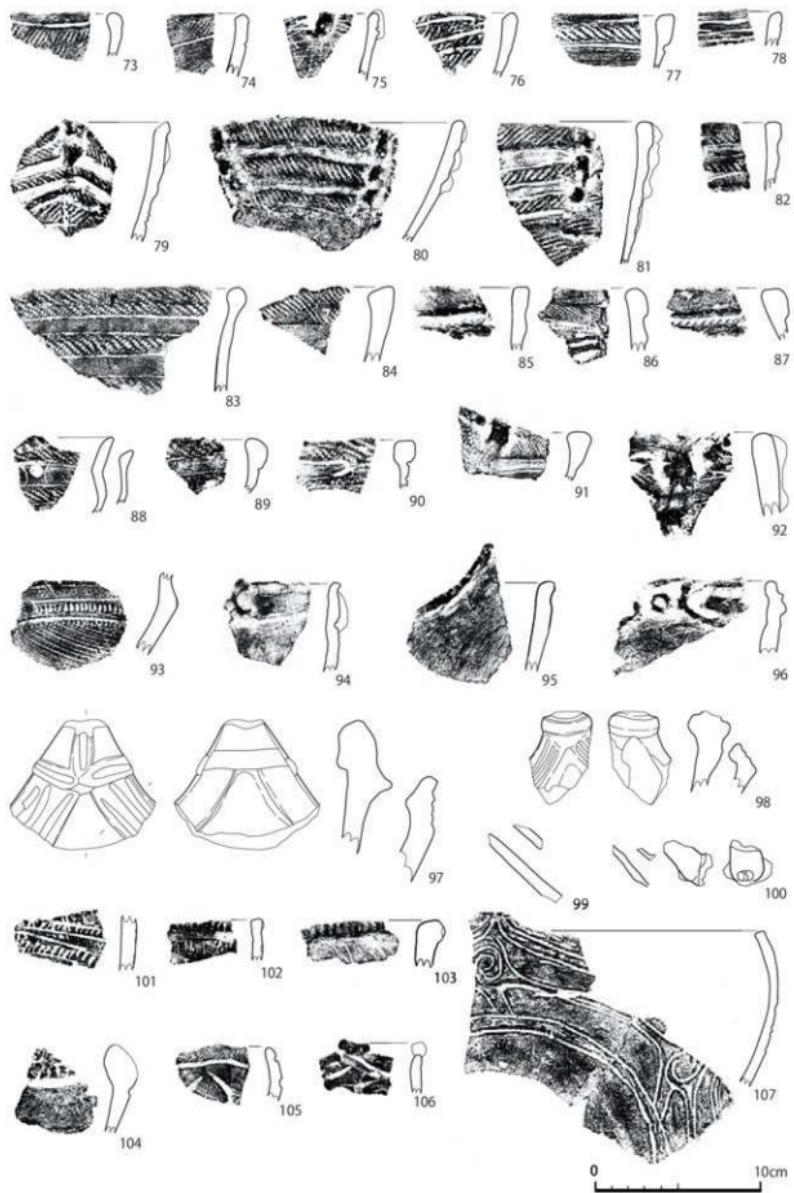


第5図 B区採集土器

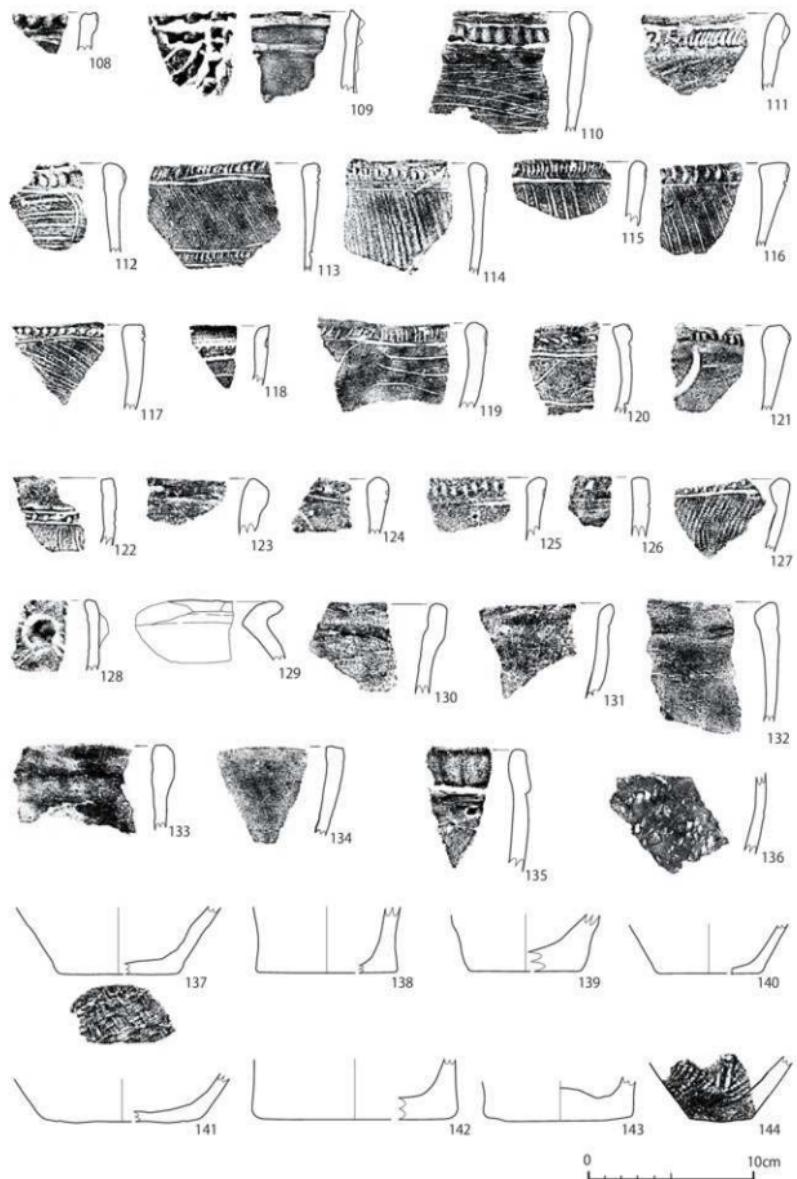


0 10cm

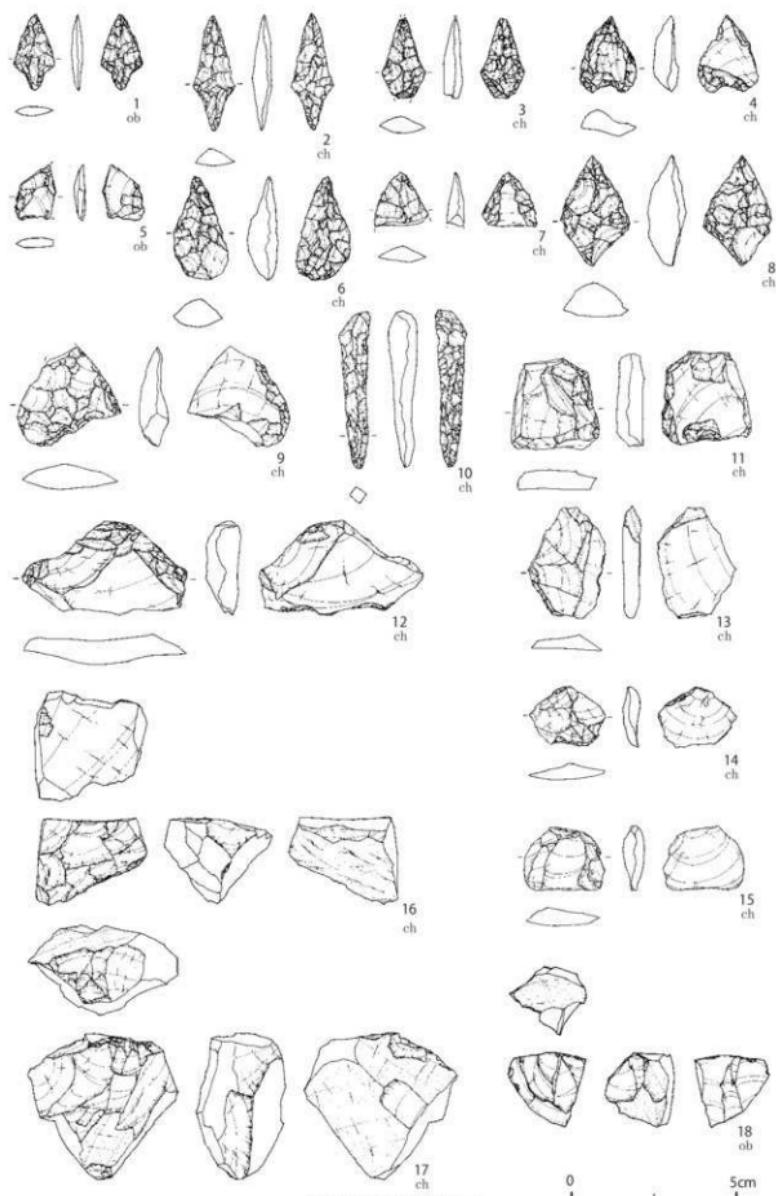
第6図 B区採集土器



第7図 B区採集土器



第8図 B区採集土器



第9図 B区採集剥片石器類



写真1 A区全景（北東から）



写真2 A区北壁土層断面（南西から）



写真3 A7・A6北壁土層断面



写真4 A7北壁土層断面・遺構検出



写真5 A区東壁土層断面



写真6 A区土層断面実測作業



写真7 A区実測作業



写真8 A区調査風景



写真9 B区南西側土層断面



写真10 B区西壁土層断面



写真11 B区南壁土層断面



写真12 B区サブトレンチ遺物出土状況



写真13 B区サブトレンチ遺物出土状況



写真14 B区サブトレンチ



写真15 B区掘削堆土ふるいかけ



写真16 平板測量作業



写真17 レツゴー縄文1



写真18 レツゴー縄文2



写真19 レツゴー縄文3



写真20 レツゴー縄文4



写真21 レツゴー縄文5



写真22 レツゴー縄文6



写真23 縄文衣装体験



写真24 シニア向け
現地説明会



写真25 子どもの未来創造
大学 発掘体験



写真26 拓本体験



写真27 土器破片楽譜による
即興演奏



写真28 現地説明会（B区）



写真29 斯花祭での発表



写真30 斯花祭での成果展示



写真31 中根公民館での成果
報告会



写真32 栃木県庁での
プロジェクト報告会